

## 自己資本とは

### 1. 自己資本とは、株主が出したお金と会社が蓄積したお金の合計

貸借対照表の右側（貸方）に記載される『負債の部』と『資本の部』は、会社の資金調達状態を示しています。

『負債の部』は借りて資金を集めた状態を表し、将来に返済義務のある「借金」を示しています。これに対して『資本の部』は、お金を自分で集めた状態を表し、返済の必要のないお金の自己調達状態を示しています。

このため『負債の部』を他人からお金を集めた状態を示すということで『他人資本』、『資本の部』を会社自身が自分でお金を集めた状態を示すということで『自己資本』という言い方をします。

もう少し詳しく言いますと『資本の部＝自己資本』は、「株主が出資したお金」と「その会社が、会社設立から現在に至る利益のうち税金を支払い配当等を行った後最終的に会社内部に蓄積したお金（内部留保という）」の合計ということになります。

従って『資本の部＝自己資本』は、返済の必要のないお金ということで、その額が大きければ大きいほど経営状態が安定し良好なことを表します。

[図表 1]

		B / S			
		【資金の運用】	【資金の調達】		
資 産 の 部	流動資産			流動負債	負 債 の 部
				固定負債	
	固定資産			資本金	資 本 の 部
				資本剰余金	
			利益剰余金		
資産の部合計		=	負債・資本の部合計		
//			//		
総資産		=	総資本		

## 2. 自己資本比率で会社の安全性（健全性）がわる

貸借対照表を整理しますと、資産の部合計（総資産）＝負債・資本の部合計（総資本）＝負債の部（他人資本）＋資本の部（自己資本）ということになります。それを表示したのが〔図表1〕です。

従って、会社が運用しているお金（資産の部＝総資産）は、借金（負債の部＝他人資本）によるお金か、自分で集めたお金（資本金、資本剰余金＝自己資本）か、経営の結果獲得したお金（利益剰余金＝自己資本）かによるしかありません。

会社が運用しているお金（資産の部＝総資産）に対する資本の部（自己資本）の割合を『自己資本比率』といいます。

$$\text{自己資本比率} = \frac{\text{自己資本} = \text{資本の部} = (\text{資本金} + \text{資本剰余金} + \text{利益剰余金})}{\text{総資本} (= \text{総資産})} \times 100$$

「投下している資本」のうち「返済の必要のない資本」の割合ですから、この自己資本比率が高ければ高いほど安全性の高い健全な会社ということがいえます。

といっても自己資本の中身によっては、安全性の内容が違ってきます。つまり、資本金や資本剰余金が多くて、その結果自己資本比率が高い（増資中心型の企業）よりも、利益剰余金が多いため自己資本比率が高い（内部利益中心型企业）の方が長期的な収益力があるより健全で安全な企業であると見ることができるからです。

## 3. 「利益剰余金」は決算書を読む上のキーワード

決算書で会社の経営状態を見ようとするとき、真っ先に目を向けるべきところが、貸借対照表の右下『資本の部』の中にある「利益剰余金」です。

「利益剰余金」は、一般的にその会社の内部留保の集合体を示します。つまり、会社設立から現在に至るまでの内部留保の合計額を表示しています。

会社が経営活動で得られた利益をコツコツと蓄積してきた努力の結果を示しており、経営者の経営手腕を見ることができる経営者の成績簿として捉えることができる場所でもあります。

従って、「経常利益」が会社の短期の収益力を示す指標としたら、「利益剰余金」は長期の収益力を示し会社の優良度を判断する大変重要な指標であるといえます。